

# 看護活動の基本理念としての人間尊重

## －看護と福祉の接点を求めて－

木 下 安 子

新潟青陵大学看護学科

Respect for people as a basic philosophy of nursing :  
seeking common ground between nursing and welfare

Yasuko KINOSHITA

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY  
DEPARTMENT OF NURSING

### Abstract

Even in our work, nursing and welfare activities exist as the most human act of “holding people in high regard.” At present, these activities stand out as professions that assume responsibility for a useful role in modern society. However, if we look to the roots of this development, it is clear that this began as a simple act of love for others. The origins of nursing and welfare by tracing the lineage of this respect for people that has come down to us from this beginning will be discussed.

Looking back to when modern nursing was introduced to Japan in the 19th century during the Meiji Era, the establishment of homes for the aged, the management of nurses, and activities showing respect for people as can be seen in the legacy of Nobue Terashima are investigated. Also, considering the respect for people put into practice in the 20th century nursing developments pioneered by Kazuko kōno, Akiko Ohara, Masako Yano, Sawako Kawamura and others of distinguished ground-breaking activities for the care of those with intractable or incurable diseases and mental retardation, this basic position at the root of two centuries of nursing will be investigated.

### Key Words

nursing, welfare, respect for people, the handicapped, profession

### 要 旨

ひとの営みの中でも、最も人間的な、「人を大切にする」行動として、看護活動、福祉活動は存在する。それらは現在、近代的社会の有用な役割を担う専門職業として自立している。しかし、その発生にさかのぼってみれば、極めて素朴な人を愛する人間行動として始まったに違いない。その根源から脈々として伝わる人間尊重の系譜をたどり、看護、福祉の原点を考えたい。

近代看護活動が日本に導入された19世紀、明治期にさかのぼり、老人ホームの設立、運営をした看護婦、寺島信恵の足跡に見られる人間尊重の活動を掘り起こした。また、20世紀の看護婦活動の中から、難病や知的障害者等に対する特色のある開拓的活動の展開をした河野和子、小原安喜子、矢野正子、川村佐和子らの活動を取り上げ、その中に見られる人間尊重の実践を重ね、2世紀にわたる看護職の根源的な基本姿勢を検討した。

### キーワード

看護, 福祉, 人間尊重, 障害者, 専門職業

## はじめに

ひとの営みの中でも、最も人間的な、「人を大切にする」行動として、看護活動、福祉活動は存在する。それらは現在、近代的社会の有用な役割を担う専門職業として、それぞれ自立して活動している。

しかし、その発生にさかのぼってみれば、極めて素朴な人を愛する人間行動として始まり、ほぼ同様の活動であったに違いない。人間愛、大きくいえば人類愛の行動である。古くより受け継がれ、今に伝わる人間尊重の営みの系譜をたどり、看護、福祉の原点を考えたい。

特に近代看護活動が日本に導入された明治期にさかのぼり、老人ホームの設立、運営をした看護婦、寺島信恵の足跡を掘り起こした。

1900年（明治33年）、京都看病婦学校の卒業生である寺島は、神戸に友愛養老院を設立した。これが現在、神戸市山手通りにある神戸老人ホームの前身である。この看護職による社会福祉施設の設立は、今世紀の看護の発展とその方向性を示す先見的な活動であった。それは百年を経た西暦2000年（平成12年）、少子高齢社会の到来により、再び看護職による社会福祉分野での活躍が期待される介護保険法が発足している。

寺島の老人看護活動の基本理念は「人間尊重」であり、その実践であった。では、この看護理念が20世紀を通し、どのように継承され、21世紀に向けてさらに発展していくのであろうか。新世紀を迎えた今日、基本理念に立ち返ってみる必要があると考える。

20世紀の看護婦活動の中から、高齢者のみならず、社会から忌避されたハンセン病や結核、精神障害者などへの救済や看護の提供、さらに難病と総称される治療困難な疾患への活動の系譜をたどり、それらを貫く人権意識について検討する。それは同時代を看護職として生きた筆者自身、ともに体験したものとしての視点からの選択である。

難病や知的障害者等に対する特色のある開拓的活動の展開をした河野和子、小原安喜子、矢野正子、川村佐和子らの活動を取り上げ、その中に見られる人間尊重の実践を重ね、20

世紀にわたる看護職の根源的な基本姿勢を明らかにしたい。

## 1. 神戸養老院の高齢者ケアの評価

### 1) 寺島信恵の足跡

1894年に看護婦になった寺島は派出看護婦として京都、大阪で働き、1897年に友人らと友愛派出看護会を作り、その会長に推された。当時、神戸には濃尾大震災や日清戦争などで家や家族をを失った貧しい人々が集まっていた。看護婦会の前の借家に3人の身寄りのない老女を世話したのが始まりで、神戸養老院を開設するに至った。寺島の老人看護活動は、苦境にある孤老たちに安らぎの場を提供しようとする直接的な看護活動であった。看護婦としての仕事として当然、その延長線上にあったのである。



寺島信恵（神戸老人ホーム所蔵）

### 2) 賀川豊彦による評価

彼女たちの活動を賀川豊彦が知ることになる。彼は広範な分野で先駆的、啓蒙的な社会活躍を行うが、1909年に神戸の新川に住み、貧しい人々への奉仕活動を通して寺島の活動を知った。そして次のように述べている。

「毎年、数人の老人を寺島女史の養老院に送ったが、私はその養老事業ほど美しい救済事業を嘗てみたことがなかった。そこに送られる老人は、経営者と経営者の団体が看護婦の群である為に、如何なる老人といえども決しておろそかには取り扱われなかった。すべての老人は、自分の親の如くに<sup>1)</sup>取り扱われた」とその処遇を賞賛している。看護婦は、現在社会福祉事業を見なされる「ナーシングホーム」の開拓者であり、もっとも理想に近い老人ケア実践を行って、賀川に感銘を与えた。彼の著書でベストセラーになった小説「死線を越えて」<sup>2)</sup>にも『富沢のぶ』の名前で、その活動が書かれている。

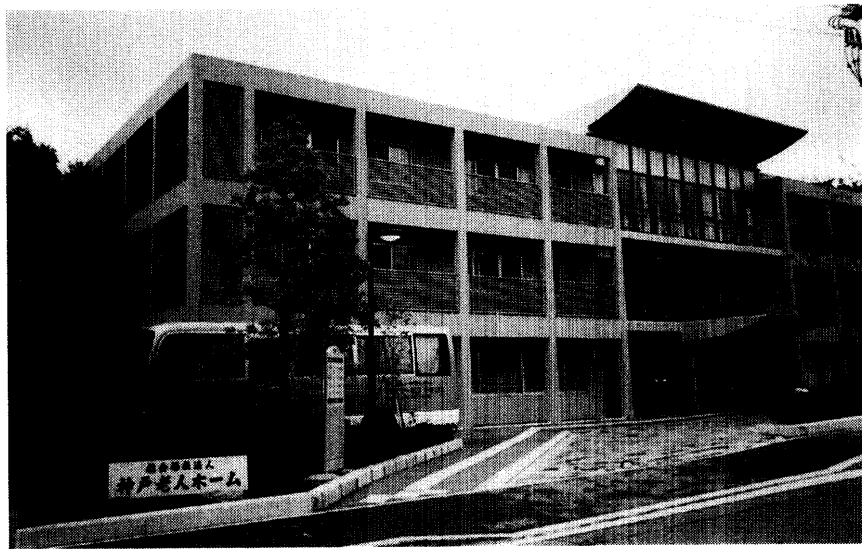
寺島のこの事業への動機を要約すると、次のようである。「育児事業は各府県に孤児院が創設されているが、養老事業はかえりみる人がいない。しかし老人は『人生の苦戦苦闘

の戦いたる断腸の悲劇的歴史』を持ち、『前途に一点の光明なき悲哀の極に陥りたる孤老のために』<sup>3) 4)</sup>創設したと。

このように明治期に近代的な看護教育を受けた先達たちの活動は、この100年の初頭を飾るにふさわしい看護発展の萌芽といえよう。またその活動を支えたのは「いかなる老人もおろそかには取り扱われない」人間尊重の理念である。

賀川は1926年に「看護婦崇拜論」を書いている。そこにも同様の趣旨で述べ、「日本において、寺島女史のような看護婦を持ったことは、誠に<sup>1)</sup>光栄であったと言わねばならぬ」と結んでいる。

この高い評価を受け、賀川の活動にも影響を与えたであろう寺島の看護理念と実践が、その後の看護へ伝承されたであろうか。



現神戸老人ホーム（神戸老人ホーム刊パンフレットより）

## 2. 今世紀の看護の特徴

寺島が学んだ京都看病婦学校は、1886年に同志社病院とともに新島襄の推進によって出発したが、新島は1890年に死亡した。寺島は1892年に入学し、創設時代の外国人の医師や看護婦のリーダーシップによった時代の最後に教育を受けた。その後、中心的であったドクターベリールら、外国人医師が帰国する。

日本は文明開化と欧米の文化を受入れ、先

進国の後を追ったが、教育勅語発布後の国粋運動、キリスト教に対する圧迫などが始まり、同志社での看護教育も形を変えていく。

日本の1900年代の看護教育は、医師の教育が官立大学を基盤として行われたことと異なり、医療機関に雇用した職員教育としておこなわれ、公的支援はなかった。しかも教育の機会均等は小学校までで、女子が高等教育を受ける教育制度ではなかった。したがって看護教育が専門教育として確立する条件が極め

て乏しかったといえる。加えて国は産業の発展を推進し、国民の生活の格差を生じた。医療は有料であり、経済的に恵まれない人々は、治療や看護は受けることがむずかしかった。実費診療所やセツルメント活動など、医療の社会化を求める運動が起こった。また、なかでも結核やハンセン病のように感染を恐れるために、或いは精神障害者へは偏見が生まれ、社会から疎外された。

また、国民生活の向上をはばむ外国との戦争が続いた。こうした時期にあって日本の看護は、のびやかに発展することが難しかった。むしろ女性としてさまざまな生活上の苦しみをも味わいながら、耐える時代であった。

そして第2次世界大戦の終結を待って1945年以降にめざましい展開をみせる。それは1948年の国際連合に於ける「世界人権宣言」があり、わが国では新憲法制定により人権意識が高まったことと無関係ではない。世界保健機関（WHO）を中心に1999年、国際高齢者年として様々な活動が展開された。世紀半ばで大きな転換点を迎え、世界的に平和と人間を大切にしようとする方向にすすんだのが今世紀の大きな特徴といえるだろう。

敗戦による米軍の占領下、男女同権とする憲法の理念により、政治上、教育上の女子の差別はなくなった。医療改革も行われ、看護の基礎教育は高校卒業後3年と改められたが、各種学校に止まり、専門学校や短期大学などでの養成は少なかった。大学は高知女子大学に衛生看護学科が1952年、翌53年に東京大学衛生看護学科がこれに続いた。

こうした変革により、この世紀後半の看護活動は、寺島によって示された人間尊重、人間の権利を守る看護が育つ条件が整ってきたと考えられる。

しかし、このことを広い歴史的視野にたって考察するには時間的に早く、不十分なものになろう。筆者は1945年より看護教育を受け、以後、現在まで今世紀後半を看護職として歩んできた。この個人的な体験にもとづき、人権意識を看護の基本において、共に学び、活動した看護者たちの特徴を検討することによって、20世紀の看護の遺産として次世紀への提言としたい。

### 3. 人間として生を全うできるよう患者を支える看護活動

20世紀の前半には、近代化する医療の一翼を担って看護活動も発展する。主として急性疾患への対応が中心であり、多くはプロフェッションしとしての医師の補助的役割を果たした。長期慢性疾患であったハンセン病や結核の患者たちは、「無知」「伝染」へのおそれから人権を無視した隔離や差別をされていた。そうした時代背景のなかでの看護活動が、自覚的に患者を支えることは極めて困難なことであった。むしろ、看護婦自身が自立した職業人として生きることも難しかった。

その反省をこめ、世紀後半の看護の特徴は、看護職の自立と、人々の人権保障の基本である健康を守る活動が重視され、その提供者としての自覚が高まった。こうした時代の要請を受け、目的意識をもって特色ある看護活動を展開した人が増していく。

事例をあげ、その活動を紹介する。

#### 1) ハンセン病看護を目指した河野和子氏

1945年、聖路加女子専門学校に入学した。熊本から上京してきた氏は「私はハンセン病患者の看護をするので、看護婦になるために来ました」と語り、クラスメイト達を驚かした。当時ハンセン病は特殊な病気と考えられており、また入学時には他の学生は自分の将来がぼんやりしか見えていなかったからである。それに対し、氏はすでに看護婦になる明確な目標をもっていた。熊本の出身であり、熊本は肥後妙法寺がある。法華経を信仰すればハンセン病は治ると信じ、江戸時代から患者が集住していた。ハンナ・リデルが、1889年来日し1895年、回春病院を創ったところでもある。妙法寺境内は、1926年から1930年までに警察権力によって8回の「かりこみ」が行われ、70人の患者が「収容検挙」された。また1940年には「大検挙」があり、64戸の患者家が壊され撤去されている。

こうした歴史のある地域で多感な青年期をすごしたことが、氏の決心の背景にあったと推察される。

専門学校卒業後、国立療養所星塚敬愛園、

同多摩全生園でハンセン病の療養所の看護婦として、准看護婦養成所教員、看護部長等を歴任し、新しい看護体制を作るためにあらゆる工夫と努力を精力的に行い、隔離でなく、社会人として生活できることを目指す新しいハンセン病看護の推進した。

氏は療養所への就職時、当時、厚生省看護課長の金子光氏に激励と助力をうけたと感謝しており、今回、この報告を行うにあたって、直接、金子氏に当時を記憶されているか訊ねた。金子氏は自分も看護を目指した原体験として女学生時代、学校の修養会が御殿場で持たれた際に、ハンセン病患者との出会いがあり、その人たちのために働きたいと考えた。そして教師の助言もあって看護の道を進んだ。その後、保健婦になったが、河野氏がハンセン病看護へ進むことに共感し、嬉しく思ったと語った。

河野氏は国立療養所退職後、重度の知的障害児（者）のための施設、社会福祉法人天上会新樹学園を鹿児島県高山町に夫とともに創り、一貫して障害者が人間らしい豊かな日々を過ごせるための活動を続けている。

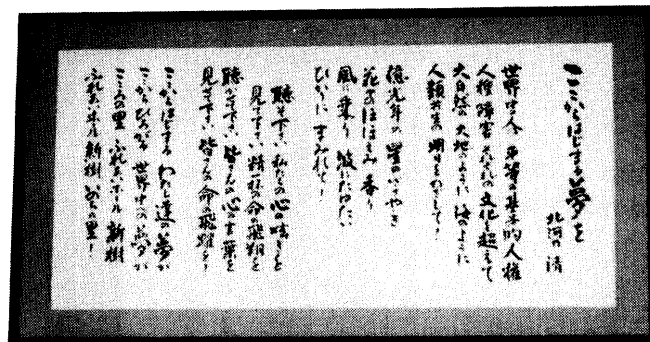
障害者は軽度の場合は在宅生活が可能で、施設には重度の入所者が多い。地域との交流を重視し、多目的ホールを持つ交流の会館を造り、活動が行われている。会館の入口には、谷川俊太郎氏の「ともに生きる」の文字が迎える。舞台側には北河内清氏の達筆な字で、「ここから夢を」の詩が「世界中の人と平等の基本的人権……聴いて下さい 私たちの心



新樹学園交流会館の入口にかかげられた  
谷川俊太郎氏の額

の眩きを 聴かせて下さい 皆さんの心の言葉を 見せてください 皆さんの命の飛躍を……の額が掲げられる。北河内氏はハンセン病の患者さんであった。かつて河野氏が総婦長として献身した、らい療養所に入院していた。その繋がりがあって、この建物のために患者達が浄財を寄付している。

隔離され、人間としての権利を奪われた半



北河内清氏の詩 ここからはじまる夢を

生をおくった人達が、らい予防法の廃止によって、自らの人権を回復し、他の障害者の社会復帰のための建物を支えている。

## 2) 小原安喜子氏と「蕾の会」

河野和子氏と同級であった筆者は、「小島の春」を書いたハンセン病療養所医師であった小川正子が遠縁にあたることや、河野氏の影響でハンセン病に関心を持っていた。専門学校卒業後、家族感染による児童の結核対策から新設された、小児結核療養所を経て保健所で結核患者の在宅訪問を中心に働いた。当時の結核の悲惨さに、若い保健婦にはなす術がないと無力感に襲われることもあった。しかし、結核検診などの予防活動の意義や治療薬の開発などが支えになり、活動した。その後、東京大学に新設された衛生看護学科に移る。多くの学生たちと出会い、時には仕事をともにする機会をえた。特に初期の学生、一回生（1956年卒業）から六回生（1961年卒業）ごろの学生たちは、新設学科でともに学んだ思いが強い。印象深いのはサークル「蕾の会」を作り、自分たちの将来の仕事を追求し、語り、学ぶ場であったことである。その呼びかけ人であった小原安喜子氏とは、ハンセン病への関心を持つことで一致し、親しくなった。

氏はハンセン病患者への活動を希望し、1956年入学時、すでに他大学のキリスト教学科を修了していた。衛生看護学科卒業後、さらに医学部をめざし、医師となり療養所等で働き、台湾や韓国等、海外でも活動を行っている。患者たちの長年の願いであったらい予防法の廃止までの長い道のりを患者とともに歩いたのである。「小原さんを支える会8年の歩み（1972～1980年）」は、彼女の活動を小冊子にまとめたものである。それによれば、韓国の南にある愛養再活病院を中心に小鹿島の国立らい病院、日本の統治下、小鹿島更生園と呼ばれた施設での活動を行い報告している。その他、学術論文も多いが、海外のハンセン病理解のための著述に力を入れ、あとに続く医療関係者への学習、啓蒙に役立っている。

## 3) 蕾の会

蕾の会は東京大学衛生看護学科の独自のサー

クルとして生まれた。大学には沢山のサークルがあり、多くは学科を越えて医学部の学生たちと、あるいはもっと広い範囲で集まりが持たれていた。そうしたなかで、衛生看護学科の一回生（1956年度卒業）から六回生（1961年度卒業）ころまでの学生たちが任意に参加していた。自分たちの将来の仕事を模索し、ともに学び合った。小原氏の手になる呼びかけのビラがある。藁半紙に謄写版ずりのものである。一部を引用する。

「『この衛生看護学科に何を学びとろうと求めているらっしゃいましたか』

— 中 略 —

私たちは同じ道を進もうとする人達が気持ちの一つにして行くことが大切だと思います。この皆の健康を守っていこうする仕事は貴重であり、私たちの働くべき分野は広いのです。私たちは卒業し、社会へ出たとき、何をなすべきでしょうか。社会は私たちに何を要求しているのでしょうか。私たちが身につけて出ていく技術をもって社会の大きな流れにどのように参加すべきでしょうか。

— 中略 — 私たちがこの足で歩きまわるとき、声なき社会の声が私たちに呼びかけているのだということを、痛切に感じます。待っているではありません。私たちがレールをしき、車を走らせなければならないのです。」

また、1957年11月の第1回集会の案内には「衛生看護学科に学ぶ私たちは、理想と可能性を追求し、確とした自身の理想像建設とその貫遂のためにしっかりとした体勢を整えなければ」とある。

以上のように、抽象的ではあるが、若さと真摯さが溢れる文章のなかに自分たちのなすべきことへの熱い思い、使命感が込められている。この呼びかけに多くの学生が参加した。残っている記録によれば、小野沢久美子（寺山）佐藤京子（上原）進藤摂子（光岡）綾部縫子（塚田）飯田道子（金子）原田正子（矢野）川崎美和子（野口）海野文子（宮地）など、いずれも現在の保健・看護の第一線で、特色ある各分野での開拓者であり、リーダーである。

特に次の矢野正子氏と川村佐和子氏は、ともに「難病看護分野の開拓者」として、大き

な役割を果たした。

#### 4) 矢野正子氏

東京大学衛生看護学科を1960年度卒業、ただちに大学病院外科病棟等での看護婦として就職し、臨床看護の経験を積んだ。大学出の看護婦は、臨床の第一線では働かないだろうと言われていた時期であった。その後、母校の看護学講座で教育や研究にあたり、ハンセン病やスモン患者調査等をも研究対象とし、早くから治癒困難な患者問題を手がけた。東京都に革新都政が生まれ、難病患者に光をあてる対策が始まり、東京都立府中病院（のち神経病院）に婦長として就職、この新たな難病看護の課題を精力的に開拓し、その基礎を築いた。

その後も厚生省看護課長等を経て、静岡県立大学看護学科長として、また1999年、日本看護科学学会の第19回学会長として重責を果たしている。

#### 5) 川村佐和子氏

小原氏の一年後輩で、こども時代に母の結核療養の体験をみて育つ。サークル活動「蕾の会」では小原氏らと全国のハンセン病療養所を見学して歩く。後にスモン患者と出会い、患者会を組織するなど、社会へ問題を提起した。のち、矢野氏と同じく東京都立府中病院（のち神経病院）で、難病患者への組織的な在宅看護活動を開拓し、また保健医療福祉の連携の重要性を提起した。この活動の成果は、患者たちの生きる意欲や家族の生活崩壊を防ぐなど、人権を守る立場が貫かれ、新しい難病対策を提起した。これは高齢者の在宅看護を発展させる契機ともなった。1976年、毎日新聞が主催した国際婦人年の「日本の選択」論文に応募した川村氏他による“難病と女性”が入選した。上記の内容の実践が評価されたのである。

1998年開学の東京都立保健科学大学の学科長として活躍し、その教育目標として次の3項目をあげている。

- ① 高度な専門性に加え、創造性と豊かな人間性を併せもった保健医療職を養成す

る

- ② 臨床、教育、行政等の各分野における保健医療職のリーダー及びコーディネーターとなる人材を育成する
- ③ 保健医療および関連する領域において、総合的に教育研究する基礎的能力を備えた人材を育成する

これらの目標に川村氏を中心とする大学教員集団がめざす意気込みが感じられる。創造性、人間性、リーダーシップ、総合的教育研究能力は、いずれも難病看護に取りくむ姿勢として、常に氏が発揮してきたことである。

こうしてすでに実践によって試され、練りあげられた教育目標を掲げることは、実現が保障され、単なる飾り物でおわることなく、新しい看護科学を学生とともに築いていくことが期待できる。

日本看護科学学会の20回学術集会が東京で開催、学会長として責任を果たした。

以上、いずれも治癒困難であり、社会疎外を招きやすい、いわば難病患者のケアに取り組んだ開拓者である数名の代表者をあげた。自立的で堅固な意志と、患者の人権に強い正義感を持ってこの活動を行ったのである。

## 4. 難病患者の看護実践と研究

結核、ハンセン病をはじめ、知的障害など、すべて慢性で治癒困難である疾患の看護は、患者の多彩な、且つ深刻な症状に対するケアのみでなく、家族を含む生活上の困難、さらに地域社会での疎外や医療サービスを受けにくい状況に立ち至るのである。

これらの難病患者の問題を社会に提起したのは患者たち自身の社会的運動である。患者たちの困難な問題解決のために患者会を結成した。そのなかに看護職が協力し、裏方役や、ときには中心となって、時には動けない患者たちの代弁者となった。

難病患者の要請に応え、病院や研究所が建設され、医療、保健、福祉活動が開始される。

一般的に見ればこれで患者たちの課題が解決されていくはずである。しかし、治療困難であることは、地域社会に生活者として退院することが出来ない。その在宅での生活を可能にする体制をどう保障できるのか。このことは今まで経験したことのない、新しい看護の方法論を必要とした。しかもそれは、極めて社会的な視野を要求される分野である。

新しい困難な問題を医療、保健、福祉活動が連携し、具体的に問題解決をはかり、その実践を一般化するための研究活動を継続する。これを繰返し、論文や学会での発表が活発に行われ、行政上の施策として実現をみる場合も多い。

こうして21世紀での大きな課題となる高齢者看護等への提案ともなったのである。

## ま と め

寺島によって幕をあけた今世紀の人権を守る看護は、その後、高齢者のみでなく、長期慢性疾患など、伝染性、非伝染性を問わず、その社会的視野をもって対処が求められ、今、次第にすそ野を広げ、当然のこととして発展するきざしが見える。

特に医学的な対応ばかりでなく、社会科学的方法論を要することから、保健、福祉の連携が始まった。また、看護職の人権を守る職務への自覚も高まり、養成も一般教養を重視する看護系大学が増える方向にあることに希望を抱く。

総合科学としての看護を基礎にしたとき、看護の発展はゆるぎないものになる。患者の人権を護ることは、看護婦自身の自立が基本である。そこに患者が主人公であることを自覚した看護が始まる。豊かな人間性に基づくケアの提供が基本であろう。新しい医療の概念としてインホームドコンセント、患者の自己決定を重視する方向にあるが、これも患者を人間として護る看護者の支援がもっとも重要である。

人権尊重の看護は、今世紀にさらに発展することを期待する。

## 注

- 1) 寺島信恵については、  
木下著 近代看護史 1969年 メジカルフレンド社 pp97～101,  
看護史 1976年 メジカルフレンド社 pp65～67,  
稲垣裕子・木下安子 神戸養老院の創立者寺島ノブへの業績 医学史研究 NO.72 1998  
pp26～27 参照

## 参考・引用文献

- 1) 賀川豊彦 看護婦崇拜論 1926年
- 2) 賀川豊彦 死線を越えて 改造社 1920年
- 3) 寺島信恵 神戸養老院案内 1903年
- 4) 細川海天 老人福祉に生涯を捧げた女性たち 1991年
- 5) 磯村英一 賀川豊彦を現代に生かす 賀川豊彦学会論叢6号 pp.1～4 1991年
- 6) 山田 明 1910年代貧民街における障害者の受障と落屑 神戸新川地区・賀川豊彦の活動著作から 賀川豊彦学会論叢2号 pp.28～50 1989年
- 7) 小原安喜子他 韓国のらい医療に参加して 小原さんを支える会8年の歩み 1972～1980年報告 小原さんを支える会 1980年
- 8) 小原安喜子 国外のハンセン病 皮膚39巻6号 pp.660～669 1997年
- 9) 小原安喜子 海外医療 ハンセン病夏期大学テキスト pp.45～47 1998～1999年
- 10) 小原安喜子 WHO/MDFの実施地域の素顔とそこで考えたこと Jpn.J.Leprosy67 pp.345～351 1998年
- 11) 蕾のつどい 第1回集会おしらせ 1957年11月21日
- 12) 蕾のあつまり 1957年12月5日
- 13) 蕾の会 新入生歓迎4月例会 1958年4月26日
- 14) 蕾の榎 3月活動のために 1959年3月
- 15) つぼみ 5月の集い 1959年5月31日
- 16) 蕾 6月例会 1959年6月29日
- 17) 川村佐和子 難病に取り組む女性たち 勁草書房 1979年